

用四方之由被存歟、曾以無其謂、所詮於禁中御相伴之時、清花の大中納言、自前々三方ニ相定候上者、爭於公界可被用四方乎、諸家更不可免之事也、於私宅者、大臣之孫子迄ハ用四方候、是ハ堅固内内ノ儀候、如愚老實枝原モ内儀之時、四方受用理運事候、若如此之儀被思直、清華之衆被及異儀哉ト推量候、細縁之三方ハ、六位藏人ニ用之候、公界參會之時如此、

私云、官女上臘分之人用細縁、

殿上人、四位、五位、公界參會之時、三方勿論也、然所於親王家攝家宮門跡等、被用折敷、隨分稱雄之雲客甚以不便、仍有所存之輩、酒肴之時者令早出、或平生不昵近、是故實也、愚老雲客之時、於伏見殿給細縁三方了、於攝家モ如此之用捨尤可然哉、况諸門跡之儀、誰不可存異儀、於家禮之輩者、一向非可被量、依此義諸家之勝劣令混亂歟、無有職之所至也、

〔大内問答〕一自然として、攝家清花、其外の御公家様、御出候時は、武家衆も參會候には、御肴御盃など参りやうの事、同殿中には、如何御座候哉の事、

右に申候ごとく、攝家清花、御出の事は、稀成事にて候、於殿中も、公方様攝家門跡大臣へは四方、大中納言は三方如此略中又攝家門跡は無御參賀、武家の御相伴衆までの時は、公方様御四方、大中納言は三方、武家の御相伴衆は平おしきにて候、

〔文祿三年卯月八日加賀之中納言殿江御成之事〕御相伴衆

四方

安威攝津正守  
服部采女正守

四方

河堀田肥前守  
河尻肥前守

三方

猪子内匠  
本田若狭守

同

古片桐東市正  
古田織部

左上だん  
聖護院殿

右上だん  
菊亭右大臣殿

右ノ二  
江戸大納言殿

右ノ二  
和中納言殿

〔槐記〕享保十二年八月十二日、參候仰ニ、家熙近衛來ル十八日ニハ、東宮御方町〇 櫻本殿へ渡御ナルベ